「読む」と「書く」の関係を強化する単元構成

～地域施設を活用し自分の思いを主教材から見出す～

中岡　正年

本校提案である「問い続け，学び続ける子どもたち」をめざすために，子どもたちが主教材「『鳥獣戯画』を読む」「この絵，私はこう見る」を読みたいと感じ，感じた思いを書きたいと思うことが必要であると考えた。そこで，地域の美術館と協力し実際に展示されている作品から，子どもたちが魅力を感じたものを取り上げ作品に対する思いを書く。その文章をより良くするために主教材である高畑氏の「『鳥獣戯画』を読む」を読む。そして再度，自分の文章を改善する単元を設定した。その際，子どもたちには書いた文章を実際に美術館に置くことを伝えた。このように目的をもち，「書く」と「読む」が相互に関係をもつことで子どもたちは「主教材を主体的に読み解く」「主体的に文章を書くことになる」と仮説を立て実践を行った。また情報端末の活用も行い，自分の選んだ作品を何度も見返すことができるようにした。活動観察や実践後のアンケート結果から，主体的に本文を読み解こうとしたり，文章を推敲し改善しようしたりするなど学習意欲の向上が見られる結果が得られた。

キーワード：主教材，説明文，「この絵私はこう見る」，「『鳥獣戯画』を読む」，情報端末，美術館

1．研究目的と教材設定の理由

実践前に学級で行ったアンケート結果において「グループで積極的に話ができていますか」の項目は28人中20人が「はい」と回答している。全体で意見を伝えることも学年当初に比べ少しずつだが増えてきており，考えたことを他者に口頭で伝える意識は高まってきている。一方，同アンケートにおいて，「文章を書くことが好きですか」の質問項目に関して，「好き」「どちらともいえない」「きらい」の中で「きらい」と回答した子どもの数は5人であった。「国語の学習は好きですか」の質問に対して「好き」と回答した人数が 17 人であったことから，国語科は好きであるが，文章を書くことは苦手と感じている子どもの割合が多いことがわかった。

このアンケートの結果を受けて，「書く」ことへの苦手意識がなくなればそれを支える語彙の習得や表現することも相乗的に高まり，子どもたちの話すことや聞くこともより高いレベルになるのではないかと考えた。また，国語科そのものは好きと回答している割合が多いことから「書く」ことへの苦手意識を上回る明確な目的や意欲があれば活動も主体的になるとも考えた。

そこで，本校に隣接する和歌山近代美術館に展示されている作品の中から，お気に入りの作品を見つけ，その作品の魅力を来館者に伝える文章を書く学習を計画した。主教材の「この絵，私はこう見る」においても一つの絵が掲載されているが，実際に本物を見ることや，生活圏の中で自分たちの活動が何かしらの影響を与えると感じた時，子どもたちは興味関心を高め，「書く」ことへの意欲向上につながると考えた。また，単元を通して「自分のお気に入りの作品の魅力を伝える」ための書く活動が意識されるように，主教材の「『鳥獣戯画』を読む」の前後に「この絵，私はこう見る」を設定した。

主教材「『鳥獣戯画』を読む」においては，筆者がいかに作品の素晴らしさを伝えているかを子どもたちにつかませた。そして「この絵，私はこう見る」を，その前後に配置することで具体的に，自分が感じたことをどのように書き進めていくかを確認しながら学習ができると考えた。

本年度の本校の国語科部は「つながり学び合う子ども～視点が交わる読みの授業～」をテーマにしている。学習の「つながり学び合う」とは子どもの「知りたい」「読みたい」「聞きたい」「伝えたい」といった意欲的な活動や思いが，単元を通して継続されることと捉えている。本実践では，「作品の魅力について伝える」という活動が，読むことと書くことをより密接に関連づけることになると考えている。それらの活動を共にし，時に客観的な視点で指摘してくれる友だちとのつながりは非常に重要なものになる。さらに，同じ作品についても感じ方が違うことを認識することは他者が存在して初めて成立することである。そこでいかに自分の思いを伝えるかを考えた際に，読みの視点や感じ方に違いがあることを認識し，その相違をいかに伝えていくかを思考し，表現の試行を繰り返すことで学習に深まりがもたらされると考えた。これは，何かを得るために文章を読み進め，他者の考えに触れ，自分の知識や知恵としていくことであり，「読む」と「書く」の関係が強化されること，子どもたちがつながり学び合うことだととらえている。主教材で学んだ文章を構成する言語や表現は教科を越えて生かされて，今後も子どもたちの人生の中で思いを伝える指針となっていくと

考えている。

以上のことから，課題解決をするための話し合いを行う活動や主教材について内容理解を深める活動意欲が高まり，主体的に学習に臨むと考えた。これらの仮説を検証するために活動分析やアンケート調査から考察を行うことにした。

2．研究方法

本校の学校提案である「問い続け，学び続ける子どもたち」をめざすためにも，子どもたちが主教材「『鳥獣戯画』を読む」「この絵，私はこう見る」を読みたい，自分の思いを文章化したいと思うことが重要である。そのためには主教材をただ読み解くだけではなく，単元を通して子どもたちの意欲がつながったものにすることで，本単元を読みたい思いと文章を書きたい思いが相互に強化され，それぞれの学習も深まると考えた。

自分の感じた思いと筆者の思いに違いがあること，同じ作品について鑑賞しても，友だちが感じた思いとも相違があることを確認する。そこで「『鳥獣戯画』を読む」において筆者である高畑氏が「鳥獣戯画」を非常に高く評価しているのはなぜかを考えた。

自分が「鳥獣戯画」について感じた思いと高畑氏の思いの違いはどこから来るのか。その思いを文章全体から探ることで，価値観が異なる読み手に作品の魅力を伝えるためにはどのような言葉を選択しているのかに着目し，思いを相手に伝えるに表現について思考することになる。その思考した考えを可視化するために毎時間ワークシートを活用し，自分の考えを書くことで確認できるようにした。また，そのワークシートに書いた文章を基にペアやグループで意見を共有することで友だちとの意見の相違や一致を認識する。これらの活動を連続して行うことで，他者からの意見を取り入れ自分の考えを精選していくことになり答えを導くと考えた。

自分と他者の感じ方に相違があることに気づいた時，自分の思いを価値観の違う他者に伝える表現方法を探ることになる。その一つの方法として，主教材を読み，友だちとの意見を聞きあうことが挙げられる。それらの活動を通してものの見方を広め，考え方を深めることができるようになる。

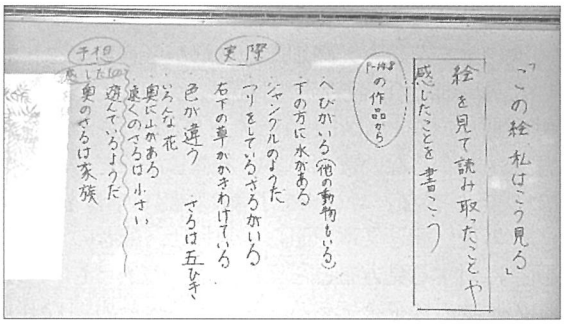
このようにして，主教材を読み，筆者の作品の魅力を表現する文章を読み解き，自分が魅力を感じる作品について表現する文章を書く活動に活用させた。

今回の実践で協力していただいた和歌山近代美術館は本校に隣接している。しかし，単元を通して自分の選んだ作品が身近にあり，何度も作品について見返すことができるように情報端末を活用し，許可を得て作品を撮影した。そうすることで子どもたちは作品を何度も見返すだけではなく，作品の細部まで見ることが可能になった。そのことで，自分が作品から感じた魅力がどの部分から来ているのかを確認し，文章化することへの手立てとなったようである。

3．授業の概要

導入の場面である「この絵，私はこう見る」において子どもたちは作品の魅力を伝える表現技法に触れ，どのような部分に注目すればよいのかを確認を行った。（図1）

図1　授業の板書



※図1　授業の板書　右側拡大

その後，実際に美術館に見学に行き，自分が魅力を感じる作品について1回目の文章を書いた。その文章をより改善させ，その文章を実際に美術館にて多くの人に読んでもらうために，「『鳥獣戯画』を読む」を読み解き，自身の文章の参考にすることにした。（図2）

図2　美術館でお気入りの作品について書く活動

次に，絵を見て，気づいたこと感じたことを整理し，思いを表す表現について確認し，グループになり，お互いの作品の魅力を伝える文を読み合う。客観的な視点から，どのように書けば，読み手にとってわかりやすい文章になるのかということを確認した。

以上を第1次とし，自分の書いた文章をより改善させるために第2次として主教材である「『鳥獣戯画』を

読む」を読むことに必然性をもち，読み解いた。

第２次ではまず，自兎と蛙が相撲をとっている印象的な場面を取り出し，感じたことや読み取ったことを書くこととし，鳥獣戯画の１場面を取り上げ，自分がその絵からどのようなことを感じたのかをまとめた。主教材である高畑氏の文章を読む前に行ったのは，筆者である高畑氏の考え方と自分の考えを後に比較することができるようにと考えたためである。

文章の読み取りに入る前に題名の「読む」とはどういうことかを考え，「鳥獣戯画」に対する自分の思いをもつことにした。もちろん絵巻物であるため「鳥獣戯画」を「読む」は，ただ読むことではない。それは，「見て感じたことを読みとること」や，「感じとったことを伝える」，「物事を予想し理解する」など自身の「書く」活動に寄り添った考えをもつと期待したためである。そのことを確認した上で，お気に入りの作品の魅力を伝える文を書くために「『鳥獣戯画』を読む」を読み進めることを再確認させた。

次に全文を読み，高畑氏の文章から感じたことを書いた。高畑氏の，読み手を意識した文章の工夫や，「鳥獣戯画」についてよくわかったと感想をもった一方で，意味がわからない言葉が多いと感じた子どもも多かったので，辞書などで意味を丁寧に確認し学習を進めた。

その後，絵と文章を照らし合わせ，筆者の「鳥獣戯画」に対する見方をとらえた。多くの子どもが，絵の中の動物の様子を伝えるのみであったため，「なぜ，こんなにも様子をみんながつかめるのか」という発問を行い，「抑揚のある」「濃淡」といった，絵の工夫について書かれている部分に注目させた。

これらのことを受けて，高畑氏の文章には「絵」と「絵巻物」について書かれていることや「事実」と「意見」の部分があることを確認した。

さらに高畑氏の文章を読み，自分が受けた印象はどの部分からきたのか理由を叙述から探った。その活動によって高畑氏の文章の工夫について確認することができた。また，子どもたちは，ただ筆者の書きぶりを真似しても，自分のお気に入りの作品の魅力を伝えることはできないと考えるに至った。

４．実践の考察

単元終了後の感想文において，地域施設である美術館を活用することで関心が高まり，「書く」ことの気持ちが継続したという記述が多く見られた。

図工科の鑑賞ではなく，本実践は国語科であるため目標は次に示すものである。(図３）そして，あくまでもこれらの目標を達成するために地域の美術館を活用し，読むことと書くことへの関心や動機を強化したい狙いがあった。

これらの目標を達成していくための一つの手段として，美術館に実際に展示されている作品について文章を書くこと，またその文章を来館者が閲覧できるように美術館に置くことを行った。またその際，自身の文章の参考とするために主教材を読み解き自分の思いが表現できる文章表現を見出すことを行った。このことは書くことだけではなく，高畑氏「『鳥獣戯画』を読む」の筆者の主張についても迫り，自身の考えを深めることになったと考えている。

さらに「読む」と「書く」が相互に関係し本実践を深めるために「自分と他者のものの見方や感じ方の共通点と相違点を明らかにし，自分の考えを深めている。【読(1)カ】」と「自分の見方や感じ方が伝わるように，表現を工夫して書いている【書(1)オ】」を達成するためにも，この二つが実践を通して子どもたちの中で相互に関係し学習を深めることが重要であると考えた。

第２次では目標を達成するために，ワークシートを用いたり，小グループ活動を取り入れたりすることで，自分の考えを表出する場面を多く設定してきた。そうすることで，他者との比較を通して，上記の目標達成を行えると考えたからである。このことで，自分の考えをより明確にするために本文を深く読み解くことにもなった。(図４）

単元目標

・自分のお気に入りの作品の魅力を他者に伝えるために効果的な表現の仕方を考えようとしている。【学・人】
・絵巻物に対する筆者の説明的な文章に興味をもって読もうとしている。【学・人】
・自分と他者のものの見方や感じ方の共通点と相違点を明らかにし，自分の考えを深めている。【読(1)カ】
・自分の見方や感じ方が伝わるように，表現を工夫して書いている【書(1)オ】
・自分の思いが効果的に相手に伝わる文章の構成や表現について理解し使っている。【知・技１オ)】

図３　本実践の目標

図４　小グループでの活動場面

また，学習したことや子どもたちの思考が継続するよ

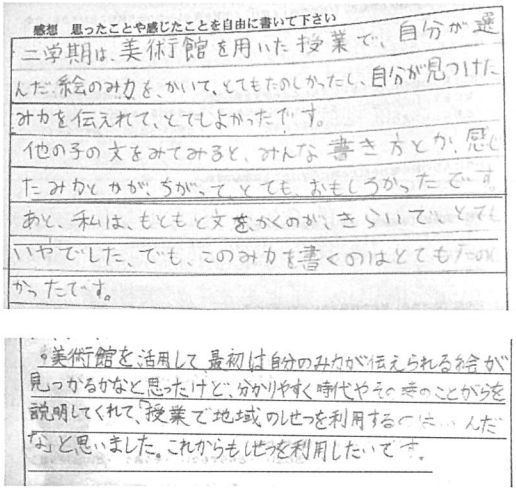
うに，教室に学習した内容の掲示を行い，学習内容を子どもたちがまとめたものを授業中はファイルにまとめ，すぐに学習の振り返りができるようにした。

このような掲示や振り返りの工夫を行うことにより，本文の内容についてより理解し，知識の定着につながったとも考えている。（図５）

図５　授業の掲示

授業後の子どもたちの感想から，自分たちの活動が題材になっているから，興味をもって授業に臨むことができたという意見が多く見られた。（図６）

本実践では，主教材だけを読むのではなく，魅力を伝えるのに際してどのような文章を用いているのかをつかませ，自分の思いを伝えることにであったが概ねその目的は達成できていたと考えられる。



感想　思ったことや感じたことを自由に書いて下さい

二学期は、美術館を用いた授業で、自分が選んだ絵のみかを、かいて、とてもたのしかったし、自分が見つけたみかを伝えれて、とてもよかったです。
他の子の文をみてみると、みんな書き方とか、感じたみかとかが、ちがって、とても おもしろかったです。
あと、私は、もともと文をかくのが、きらいで、とてもいやでした、でも、このみかを書くのはとてもたのしかったです。

美術館を活用して最初は自分のみかが伝えられる絵が見つかるかなと思ったけど、分かりやすく時代やその時のことがらを説明してくれて、授業で地域のしせつを利用するのはいいんだな」と思いました。これからもしせつを利用したいです。

図６　授業の感想

５．以前の単元との比較

授業後のアンケートや観察から子どもたちは自分たちに関係がある地域施設を活用することや自分の成果物がその施設に置かれることで，文章をより良くしようと主体的に取り組み，またそのために主教材を深く読むことになったと捉えていることがわかった。

高畑氏の文章が絵と文章が巧みに関連させている構成であること，また話しかけるような文体が親しみをもちやすく理解しやすい文書であったことも大きな要因であると考えられるが，子どもたち自身が参考にしたいと感じたことが，主教材に接する態度，内容の理解に大きくかかわったと感じている。

単純に比較することはできないが，一学期に行った本実践の主教材と類似している単元と今回の「『鳥獣戯画』を読む」の単元を比較してみると次のような結果であった。

授業後に行ったテストの「読む」の領域において，クラスの平均正答率が，一学期において行った同単元では 85%であったものが，本実践では 91%と大きく向上が見られた。

６%の上昇は大きな成果であり，本文の内容について正確に理解することになったと考えている。

６．成果と課題

自分たちの身近にある美術館を活用したことによって関係が深まり，自分が選択した作品を題材としたことによって，単元を通して「読む」「書く」ともに興味関心は非常に高いものであった。それは実際に子どもたちが書いた文章からもうかがうことができる。やはり，実際に自分の書いた文章が美術館に置かれることを意識することで，文章量も多く，何度も文章を推敲することになったと感じている。また子どもたちの文章の読み取りも１学期に行った説明文の学習と比較しても内容を深く理解し，各時間に用いたワークシートの記述量も多くなっていると感じている。

一方，今回の協力をお願いした美術館の方からの次のような評価をいただいている。

「全体の印象として、高畑勲さんの文章の影響力が強いようで、文章を書くことに力が割かれ、肝心の作品を観察して読み解くということが不十分なままのように思われます。」

この評価は，自身の感じたことを高畑氏の文章を参考にして書くということが，良い結果に結びつかなかったことを示している。しかし，子どもたちは高畑氏の文章の表現から今まで自分が表現しなかったことをすることが出来たとアンケートに書いていた。また，文量は以前のものよりも多く，自分の感じたことを書こうとする意欲は十分感じられており，単元目標である「自分の見方や感じ方が伝わるように，表現を工夫して書いている【書(1)オ】」は多くの子どもたちが，達成できたと考えている。よって今後の展望として作者の伝えたいことや作品の意図を考えることと、自分の想像を語ることなど説明と感想を明確にした上で，自身の思いをいかに他者に伝えるかを継続して研究したいと考えている。

参考文献

・桂　聖　2013 年 4 月 10 日「教材に『しかけ』をつくる国語授業 10 の方法」東洋館出版社

・和歌山大学教育学部附属小学校　2017. 3.　紀要第四十集